中村幸彦文庫
文庫 18
6

擊蒙句法

宮城県図書館

輕蒙句法

初學　秀逸　景物　肝要　對樣
別遠　本詠　倒語　名所　異物
韻字　和漢　發句　脇句

初學のるゝ面き神詞をなぜり
寄合おぼゝすくといひて
めつらき風情同なる事を好面

市村佐定文庫

行一言をもちて句を成すを
よしとせる法いと尊
しまを
草の庵志の戸ばかりとじ往
松とせるまて花のちるころ
時の来るとはかりなる此二の地あひら
しあり
志ゝこそ草木枯るとはき
竹の雑はあさかほのそれ

ありけるまにいひられとも草木竹の詞古今を思ひ
こゝ一き人のとりはなすを
義ことのうきをハ秋のふるひて
別うき人の涙をはらはれ
ゆみとろハぬやこころるゝ世
二月の別の露はれ林ふゝ
よるふくるみゝ月ろかすめ
さとる事なきやうるれとも詩のふるなく詞寄
会あり
絶ぬきハ人のかゝひ

ふれもさとるハ爰ぬしき橋
ゆくりなく人えぬ風や吹らん
笑てこそ爰らハすゑのふりにれ
ほとゝぎすとゝ世をハそむりぬ
花又ハ山のかけゐもすむ物を
風すりゝ〳〵おつる瀧なゝ
あるまてや月の水とゝ〳〵ん
式日ふれてやとゝふ眼ゝ付り
霧きゝて名殘れ哀のむまふ野こ
ゆふ日かゝひて秋やゆくらん

手枕ハ濃まれきてをく露よ
秋やふるしき人や恋しきこ
俳句会二の物寄会かやうよ付句
られこそ志ゝふ別ありられ
老ぬれハ後をゝまぬ秋爰て
ふる〳〵蛙のて山の井よ風吹ゝ
夕日すゝしき水のの松原
時雨ハなのり方おやいそくらん
花ちる山をかへりゆふくゝ
ふれハもちる山すりゝをゝてハ中へ名れゝも山

を陶淵明のいへんあるふさはしけあるへうすか
ゆゝの事尤心あすゝ山より陶といふハ其心
いちのかゝる句

かゞゝてやゝ此時は山を出ぬうせ
竹の林はうゝひまの意
竹林の七賢にとあきやゝ山て妻侍り
相乃義ふれおつる才より孫又きて
夕秋なる風の一琴
ようにたゝきぬ山ゝとのまち
月まてもえんる人ゝやゝ陽うん

意格ある句

悲趣を得たる句

と伐き沾のをとそきゝゆる
月の秋のふけゆきまふきつまりて
尤意格あり可味之
松えゆる梢をかりに風吹く
こゝろある屋もき山ゝとの秋
この句尤悲趣をえてゝりむ一の好用風神也位初
学のあてあれ可用心者き右奇妙来風格なり
きひゝきてやゝ紫れ夕煙
月ふいとふ雪と雪ゝこそなれ
尤趣句のやゝわてたゝも句内ふ成するなり者

雲とこそ成れとハ他の物ふくてハいとる〳〵りうす色
八月わいとふ雲と成とハ句の内ニ成するふりかゝ
此事尤一つゝ差別

松風さむし　尾花ふくをと
人もあ野中此里の秋暮〳〵
ありて無情をえてり
芸の油ハふるたこゝれ〳〵
捨て後あ成り世とや成ぬらん
琴音ハすてぬ世ハ〳〵き世ハなき中にいと
〳〵されとも実の〳〵き世のさ後ハすてゝ後思

しる歌し初学ほくり得〳〵に式句ハあふ名
ふ秀逸にあらす初学ニの吟ハ〳〵ふすふ成ハ
ひ歌ハ おもむき付りて
一秀逸と云ハ詞もくふくもたまやふいひくきて（いひくだきて）
いかゝ迷ふ心ハ情なれりを本とす〳〵其
詞いかゝ（いかに）注ふ

秀逸

やすくすなほにして海情がに面白くとふあり之中ニ歌を
美妙くよしゝ〳〵ハや
こゝろあり

月ハ淋しく浦ハさられぞ
さいひふハ月さ〳〵おきん成（に）ゝり
浪のひくハ月をて月の達ふる秋思意可及
あるかふきゝ此いのちきゝれす

又やえん多かけろふ山きくら
多かけろふ山といひそうこそはきやうみ秀逸の句
うきふそうや金瓜にもつうん
恋をのこしたれ垣屋の夕煙
花ゆへ心の奥にきうりり
多を捨る人のあるもふいて
月ふこそなほ面へ事もありれ
月ふ面へ千古万古心あり尤悲越あり
おなハすハ掬と雪といふも志う
花のあうそ月おぼろなる

笠ふ清香あり月に新ありとも句の面影を付り
ふふくほそそのゆとハれ（なにハつけてか）
影ふふそすれぬ山のこハ（はす）れ屋
何ふつけての誠ふハれ付て哀ぬ云ふり
花やむうれ名残なるうん
かすめとハ思はぬ月もふみてて
泡もくれてもおぼはぬ月といふ尤ぬ云ふり
ふううは花ふかきうけり帝り
又やえむもの月乃朝かすう
別ハふれそかきうふうる

西ふち花の夕乃山おろし
陽の別とふ景合わ夕の山おろしわ冬さえひて
ちるもまことふ殊ある（うた式自五秀逸ふ之作者自
讃の詞あり）
かくとくふ志ろきそせめてふけうハや
花のちりとハ風はたをり
ちるあふき契を人こふ〳〵ひきて
こゑ〳〵きふ志ろわ世の中そうき
宣ふきとふ上自詞ふ〳〵ハ世の中技業のおもて付し
おもひのふりの上ひられてゞ来すハかやうの時の事之

いたとふく松ふく風やきこゆん
浦とゝとの中ふあ里
式自の歌ふ志ろ〳〵心能付ふ
いたのまふふの秋ハきぬらん
山里ハいふとの風のそようきに
いふとふ子の妻ふあり
いまとこそまちかつるきル
志めれハいとはけふりし心ふく
老ハ〳〵て嬰兒のこゝとふ心ふ
水ふ〳〵してゝ弱もわ〳〵す

五月雨のふりそめかたに柳ふ
いつしきき松風を吹
住吉の浦の面も月見えそ
式部の風かあり世たゝ右おもかくて

景物

京物
一宴会めくてふ叫事あるへきなり其句奥味あるハ
言多京物整しといふを是をゆるすへ一こそ
堪能の不化や初学此まあ不ふ
する時そ野狐辞道岐を為て初心ゆ
不可好用又太過し

その姿ときく哭のをれこゑ
心引人のむもめ此名をとひて
かくみそれるまゝすゆすミのいろ
孤てふそうふる袖ハふるぬきし
ありとをみえぬ苔の下あ
垣木の枝ハ浪の花さ咲
月乃とつふかすむゆふ
くはのすむつ不木ふ花ときて
ハ情ふますも 彼国のぬ
第岐や時の春ハ月のみ此海

金といふはくほうことを
木の根のりいさを玉ふりるる山川
岩こそふるきさ苔ふりふりそれ
さて静のうえとみゆるも姉の袂
それの白詞多ふれども雲のあひうひふるふり
さて　さて　後乃せきこふとはれつや
幸あるかわそふついろうう
ふるるもまもるすまし弁
山ふる　法師八国のそめみる
時雨ちう　中国のふもうう

わひ人は世ハまふう飯こうふく
ちりぬ花こそおもうぎにて
岩やみさうの字ふます鏡
文のこひうふ秋乃うう
相の木の琴は忘へみ風きて
いつまもふ水るは之
上下の笠或の河原の文八ウ
ぬけわるハくれふ井は文
うつきこはうるてしこは花さて
それら前白詞すてうをふりて一ふあひう

肝要

ひさる神ゐ自余又一の准え

肝要

一連歌宴会風情すくさぬるふよりて一ニ宴伝
をいくつかたり先句景物多ハ肝要と目ふ
かけて自余を捨事ある一一縱令
松おのくるは遠のしら雪
春ゐ〻ぬ名ハ薮ちろの坂ちて
氏自松と浪ゐのあひ〻らいあれとも志ゐ
の宴会ふ
宗乃戸ハなけふのい狂かすこ〻て

行となき変りすゐ世の中
花又霞のあひ〻らひふ
さとハ夕八月いてわそり
ゐみとなく秋ハ心のさそ〻れて
大〻ちを付て春やゐるあひ〻ひ〻れ又の体ふり
ゐのとゐき庵をも池おりゐて
〻ふる松の枝のまゐ〻ゐ木
弐句曲て地を付てゐをつけす白中ハ池ハ狂ふ
りゐハ次おふるゆ〻なり自余一の准知え
志こそおのゐふ〻ハ狂

對様

上下は墓は数ハ侍りて
されふを付て志をつゝ
對様
一夢の秋朝夕山に整かゝの対様しるハ一筋
夢のあハれも時々のいそら
うき秋ハふる夕くれの心ゝ
西新の遠ゝ侍ふ雲ゝ
花なき山乃ゆゝくれの宝
ゝつれなきハ命ゝ
雪ゝをかきりゝとて捨ゝ

一〇

〻〻一〻忘ゝ事ゝ
月のゝ秋と時乃ゝ
付ゝ十分なりむゝ
志ハふる月をゝ
いゝ〻ゝふる事ゝ
旅見のゝきハ月ゝ
おもひやき人の心乃秋のす志
おゝ塗ハ水のゝ
夏川ハ入江の菓多ゝ
海琴ハ水乃ゝ人ゝ冬の白ゝ夜河ハすゝ

夜は羽をたゝ[illegible]伊勢の日の夏の仕事めつら
しといへども[illegible]は寄合みて八畳の細入江の涼
多[illegible]の詞あり

あさちといふ花さくめ草
故郷[illegible]
月さむし　ふるひきます友とふ
碧海の[illegible]は秋の秋
なを[illegible]人をおかゆ
別れも[illegible]
忘れぬとハふは俗[illegible]

ふきくらしそうきく人みある
まてしは[illegible]秋ぶもあけ
おぼえぬ孤みとくくまふりう
世うかつみちをハうを家北を
[illegible]ひのつれる[illegible]の一もと
[illegible]きのみ忘めるきめの八年かさ孤
月をしるや深山ふるん
[illegible]ゆみもふひて
とハれ孤ハのうの朔もまき[illegible]
[illegible]の[illegible]のゆふくれ

ことばのたきすぎることを深ぬ所り
ぬしもなき閑のまそ井月のきそ
貞和漢連句の句とのなれ法に所り
我身のてをおもひさまあす
いく人雲ふはきく夕煙
うくそくふくさまわたり
松原の月ひかすむ〜ひの乃
木のゝ
ゆきとゝろ色無あり先白ハ恋てはすり
ゝふ板ひとゝふ孤花を風骨あり
ほゝとゝふ月れ新をゝゝや

引違

猿ゝゝふ岩尾かくれの谷れの
猿れ水月をとる風情会あり
引違
一花ふ風を元月に雲ゝ絡ゝ事あり情緒ふあ
ゝすハあふゝ地ふ不可ゝ思喩ハ古今集に花ふ
匂ゝ散をめてゝきといひ万葉に月ふ雨をゝゝ
せをといふ事れたくひゝ
たもゝけやその秋乃夏ゝ成ぬゝ
花ゝ一月ふ雲ゝきゝそゝひゝき
見ハ電の雲ふ月をゝとゝよをたゝ

いのちみのこゝろ老のあゝはゝ
中こにたくあなきせをせてこのこゝろ
さくあなきせをこゝろる事等常みハある
ゝす色又一弥せ
はをとゝろれ山さとの春
散をこゝる余所のむ月八風こゝて
花ハ風を移ふ風情ハ流れてゝ知す春
本説
一本詞説をこゝる事そのことくきこゝろやう
そ老ふも詞をくふ色こゝろ

時こそいまはやすきめき
限あれて雪をみふ月の富士のこゝ
万葉よりほと雪公月のもちの日きえてを秋
ふるふゝと以ふの心やもちのは八月のまゝ
波の音こそ多ゝくきてゝ
かゝろおす船波の月ハのこる秋
朗詠集詩の心なゝ
ふこゝろゝこれハる和
こきゝ比姫ハ多ふあるの原
て原ふこゝろゝなる和ゝ古今の

上野よりくさうかを奥へ入つゝ白川の関に侍る一
白川の関は延喜の御代の古風なり
庵のあとはみえずして草の原
夕のけぶりを詠ずるとなん秋の暮
狭衣の主人草枕のおもさ哀れとふかしなり
問とはれしハ旅の人おもひて
ほうばいする生田の小野の原
生田川よりをすてゝ行る事らなくの物語あり
すてゝもてゆやゆかるゝ
網の目ゆれる奥の生田川

命をすつるふ生田川等の寄合ふれとも載る
奥とはくけ住を奥あり
おもひいたるもうきふたふ
苔の色とはあきをいとつし
古今集いたるとき八の山ゆ出つゝと云心之
ゆきとにゝ秋ふるむる月よゝし
古今十月よし秋すと人乃と云心之
ゆむもふ夏と却るゝてゆめ
志めるかハゝゆ秋の夕暮
清水寺の観音ゆ住ふ奥のおもたのめる原と京連

打なる圍碁に白きを持あり
そのことのくち葉のさ（ふる紅葉とく
圍碁するをのこ之ハ常の事なれともくち葉の字不審あり
雪のたえその浦よ夕くれ
わたつは乃俤此子里をりかへ
万葉にわたつみのとよはた雲に夕日さすと云事之
夏山さくらさひの末
かけ志きる楢の末葉そ秋まつに
新朗詠の心なりめつらしからぬすなれとも云説
をいひなすハかりなり

倒語

ちきよりくるはくらしみえなん
う秋に許山さととを思ふらん
右之本説をとるやうをハ世の人皆知りたりといへとも
其言をあらはすして面影ハかりをとる一解なり
武宇治中務兵部卿にわさりて物うらめしき
夕暮おりくふしれるをきゝて山さと秋杉のうけ
みもかくなりそとなかめ侍しをうつせ事なり

倒語

一当世倒語常々のむ人あり上の句詞にうけあひて
よくいひおほせつれて用之秋のくれを夕暮の秋

と云ひけの雲を花の時分と定中事あり
但俊成の歌のゆふれといひ定家の雪の夕
雪と詠する事傍例ふきみハあるす
かげハたまぬ松のゝすゑ
晴よりあゝ花を吹て
荻の葉ふむゝの風やのこるゝん
老ハふるゝきゝ夕くれのあき
時分の春ハふたをくゝへす
雪きゝのゝる月のゝ山
比文ゆすりあゝそ志ゝ侍

名所

二月の別れ夢み路をふきて
あふち秀逸とあゝす事の歌をいゝれはゝ
一名所連句ハ第一天事やいゝも中心を入名所
にゝりなすゝきせ不絶ハふの付名所れ句をつゝ
おはする事肝せすて云人ゝ
富士や筑きもかゝれきゝゝん
秋丹ゝく信濃の月乃いをのあ
富士ハ伊豆のあすゝと筑くゝ之付ゝや名所を
そゝ詞ゝにゝく事れ事之
すめとや人の代をいのゝゝん

岡の名はあ―ハ〻いなる水の月
ふるさとしてきるかきのあ〻し
大内や花の森の戸秋さりて
爰ゑ又みる人もめにし
あにまゝ後のちよはれふりハのゝにたゝ山
名所をふるいひくらゝ最高ふるあや
なれそしほのふるハのゝれそ（ほくきてハ
いとゝなり爰ハほとあひ〻ひ人もめつ
らしといふハゝをの山みゝ爰ゝ人みあひらし
伊勢物語乃心なり

雪をいゝく花やにゝむ
冬さちらきあ〻ゝ山のあきぬ霞
あしの雪ふ砌をそゝと
今ゝ雪ふのゝれ秋のあすれ
万葉ふ都を残ゝ〻ゝ〻ゝ吹とい事奥あゝて字作り
新葉ゝ紅ゝ精の名ゝにし
絵嶋ゝ石の松れむゝゝ
松一木ふそ風ハきこゝる
ゝゝふゝゝゝ浦の名れ志ゝすかゝ
雪れひまゝりひゝく入あゝ

あ　かきの雑波寺乃跡をて
神乃あらしに里そおきふ
氏宮神あふくもたゝれかまと
旅のあそひハ舟おてもあり
土佐ふます神のまつりにそ
むりにわとハ寺て春の草
佐野せ作野の原をくきれ
ゝつきに梅におるふりくき
神乃ゝ小野ゝ春秋のもみん
夏りかつてなきゝへもあり

あ三まハそ波ゝ神ふみつき川
ゝつき川とハ三逢川の事なり
風をつまりてまそーらる
春ふるふ梅ゝの里乃朝霞
きよ記ハ月に新おそあれ
神まつるまの秋の石佐乃
ゝ記柴をゝるを秋の彩
紅あゝ市当に社を神さひて
むゝきに石乃硯おが筆そめて
ほくゝやいつこゝ字に実る

冬部のうち　の一もと

浦さむし風吹あれの波の音
風吹きて波やゆるつん
神池山荒のうらふれ雲はら
竹上をうつて自余可准知や

一異物寄言好事文字のことも考えるべ
神池てをのへうち出来きまり
父ようるとすうるうる
炭乃あるき多る冠を見て
かるの大臣北詞をうて侍り

うひすると あるへうハを
鷹乃ある森北枯のむ〜鳥
きつきく杖うて老北乃るれ
杖おかむむうあうり
石の上おてやすひうり
鬱山北をうちわつふゆひのさき
こうのるきも君うをうふ
転ふれて名も白際れ羽とられて
転ふれ八名と常木百由をうとき 拾遺 集より出う
木かくれ八山乃色乃ハ　ところ

多言なるハ板ばさみ
ほとゝぎす やすむ旅人
かけふきて ちくみやもは狂ひ咲
万葉集ハ歌の寄合あり
庭とあるこれかゝ 掃きぬ
ひつふもとゝ ゝまをとめハや
梶おゝ やゝさす万葉の詞すかゝ 狂言をなき
詩なるて ハ文をあ事 ゝて使ふれ ハ常 不用之
韻字
一てをはいふるをよゝ もろこしとも申雅

韻字

但上句ハ変句ハ 不の月下句ハ てみ関ふるに
してと上下句一句停止めつゝきてハは前句ゝ
隠て行ゝ出来ハ きふり仍少れをしゝす
狂面新のたゝやそふゝん
夢さむる枕のあゝりおきて みよ
うすまく雲ふりきて 通れ
船のゆくせもしあひんきよ
よの字ハてもむる事ゝ ふ思あゝし
めれハや変化まゝるゝん
ゝれ人をふ弦もふふ思て

ほゝとゆり世たゝ不の春み世てぬれてやとふを
ゑをくさりてハすゝ
多より修ハなゝかゝよのこゝ
ゆ月しゝふまのあゝりのとりあゝす
かやゝふくさりて分あきてゆはしくゝりゝす
子ゝゑまてをや狂そゝりゝん
木ゝくゝもを孫枝のあゝれい
たの字やりて八可用すゝそハほゝふゝりゝす元
尚世常不の用てゝあしゝり
々はゝり雪の月ゝなてすゝりゝれ

うゝれとてゝそゝりゝふくゝめ
山ゝすゝ家を誰ゝ志むゝん
ゝりをゝる仙木の移りそゝまゝ
奥のすゝハゝき中ゝせき
言ゝとの人乃ゝゝゝはゝゝりき
角れゝすむ問人をふき栄の庵
ゝゝあゝをゝゝ月ゝ人をゝ
ゝゝれゝゝゝ屋のゝゝゝ里乃名
山路のゝゝゆゝゝ月ゝるれゝ
鹿乃吉北高地ちき宮の術

萩ひとむらも秋ハふくるゝほどゝ濱の松風ゝ
そのかなしきいろをけちとあり
秋ハふく露乃林の枝うれて
ちるもれゝゝ萩のむゝさき
ほそゝ　みもちふを志ゐのゆき
万葉みむらさきゝ此ゆきと志ゐ登ゆきとゝふハ行
此字や如登と窓登の中ゝ使迄暦の遷都の記
ゝふりかすゝハ山ゝゝをなり
冨士ハ　もゝ見ハ志ゐやく里ゝ此ゝ

和歌すゝ秋ハ拙ハの里此名ゝ
そめぬみちり此松乃尾の山
ちれハふり　とや人のいふゝ
浪の音すゝかのあゝみゝうけて
あ一屋の里ゝ　ゝき松原
船の引紀ゝあかけてあゝる秋ゝ
ふりゝゝ一ハ迄ゝこゝあれ
冨士あきはゝ　いれもゆゝ名ゝゝて
ゝ　ゝたつゝゝ　ゝ　ゝたひぬき
ちれハ皆常可申ゝふはゝり

武野ふくすきをかくすきかも
物と伐者てふくきすかれ
萩の吉尾花もまた風吹て
めるくらくの神の落ふ
かふ八上白みく八更おれをもむ下白もてハ
白の神に随て可用侍章ニハあくすす
山里も家ハいかりも花ちりて
春こそかれ人とりかハ
かりそめふる契りする忘
いき志すす一歌の変とふりやきん

せんとふてハけく最吉ハ好こあるくうくにかく
此詞妙白先此時ハ不可無堪能のわさハあく
れそこふきくあくし
ゆくすえも紀伊ふふうる吉野川
よしやそをとりてふとくめて
その字哉左右不一の用く
永とはらあくひのゆふれ
後の世をまるふ人のふくくを
ゆの字あるくうすとい一ともかやくわとりてハ
を奥あり弐皆皆めつくきてあくをるいくす

和漢

發句

一和漢連句の俳諧尋常のまこゝろは聊句あるやうみ
のみゝ余情や詮大白子莫京坡山岩ゝとり風情を
和文成よりかゝの古故実但漢の句こゝ風情
を和こゝろふす事作者骨法ある一し詞おて
き人のとりこゝろ八やこゝ詩の和こゝろやゝ俳こゝの用心
志や晩唐の詩ゝ俳もき句こゝ
一發句ゝ俳こゝ尋常一の用こゝろれ
にれふんと時こゝみゝ句和詮切てき一きなりこゝ
乃句みはりる一しかふりはふゝ一ても切
屋一自余八五七の五ゝて一の切や

紅をわもれぬ梅のもみぢふ
あ乎寺の嶺ふみてそのたよりあり句こゝ移
常なり」
ふけはこゝ名八のこゝけ世郭公
位牌の前みて八其頃ありかゝの句八常座の
俳こゝ屋一
時わりり又月の秋乃秋もふ
十三夜のあけすみ月の名を惜當座こゝ興あり
雲かゝり風こゝ去つゝ秋乃雨
軍陣の句餞途の發句おけ志

脇句

花と見て雪ふ枯しる枝もふ
清水寺の饗宴あみて雲に見得うう
松あさぎ々一一ほれ紅葉かな
風ふうき水ふ志つむ木の葉哉
水清し閑ふ吹を風をし
清閑寺ふて雲を立入るかやう哉事又一の秋ふう
葉はちりて木のもとふある花ふう
人の母ふをれふりする時の歩句
一脇句ハ發句ふ異あひるやふすくと付盛し
爲事ハ下句ふハかハ々しむ一より秀逸ふけ

き八ふ法を志すふおはす恵亭の千句ふ[寺]抜の
こハ時ふあふちりふをいふ發句あり
すすき夏しるめけ志けるころ
と句を作者自讃しきるけふりと云秀
句の志奥ふ寺ふや又清宗寺ふく
みさく抜ふ所ふくれ件
とありしを人こゝき脇ふのすゝき又西方寺
ふて句ふ抜ふし此庭ふ花ふりと云ふふ
ふこはいつれそ花の池ふ
恵句にて付付を南座の風景ふしきすゝ付

あらき脇句の拙文こゝにをめたし
多年式を我好敵とつゞもかつていまゝ其好をも
す南屋の好士或ハ文学をもて世ゝ者と或ハ論義
をもて世ゝ者と或ハ逸言を以て世ゝ者と或ハ高
語をもて世ゝ者と或ハ倒語をもて世ゝ者とする皆
十ゝの工拙あれ共只一篇の現況ゆゑ構て
心さし我にをて自我の悟入を期す爾〻と
あり

于時延文壬三福炑上旬
依初定草之
南伯一翁

句法解題

（前号）

連歌の道に於ける第一の大人物は宗祇にして彼は実に唯一の勅撰連歌集たる新撰菟玖波集の撰者なりき。而その前の時期に於ける巨匠は二條良基なり。良基の撰なる菟玖波集は連歌集の嚆矢にして北朝にて勅撰に準ぜられしものなり。良基は又連歌新式の制定者にして、これより本式連歌

すたれて新式連歌勃興し、やがて室町幕府の代連歌極盛の時期を導きしものにして、実にこの道の中興と仰がるるものなり。良基は関白左大臣藤原道平の子にして、はじめ後醍醐天皇に仕へ、後北朝に従ひ光明崇光後光厳後圓融の四代に歴事し、従一位太政大臣となり、三度に推せられ、関白となること二度、摂政となること二度、年六十九にして元中四年に歿す。

良基の著述極めて多し。今一々あぐるを要せず。連歌に関しては上にいへる菟玖波集と連歌新式と二者共に極めて貴重の書たり。然れども、その作句の法を説けるが如きものありとは知られずしてありしに、はからずし得たるは即この書なり。この書外題に句法とのみあるも、内題に撃蒙句法とあり、蓋童蒙を撃蒙するの義にして連歌の作法を論じ簡にして要を得たること後世の末書と一ならず。而これ実にこの道の祖と目せらるる人の著なれば歴史的研究の上には頗る大なる價値あるものとす。その発句の句法の説明の如き最も注目すべきものの一なり

この書出所詳ならずといへども故柏木探古の筐中にありしものなり、此を室町中期の書かといふ人もあれど、余はその奥書書時を下らざるものなりと信ず。奥書に延文第二初秋と記せり。これ実に菟玖波集撰出の聖々年新式制定の聖年なり。之を以て見れば、この三四年は相継ぎて連歌に心血を注ぎたりしものと思はれてこの巻の出でしも偶然にあらざるを思る。巻中に「当宗の千句に云々」といへるは、まさに菟玖波集に「文和四年五月家の千句連歌に云々」と記せる当時のことなるべし、その著者の良基たることは疑ふべからず。按ずるに勅問に應じたる旨を記せるはこれ北朝後光嚴院の勅問に奉答したるものなり。この時良基実に初度の関白たりし時なり、その一翁とある號は未他に所見なけれど、彼宮に満四十歳なりしを以て四十初老の義にすりて署せりしものか。

今や良基の連歌に於ける著書三巻を得たりなほ百韻連歌の類の多く傳らざるは遺憾なりといへど、未研究にして幸なりとつゝみべし。本書今之を謄寫して會員に頒たんとす。余この書の永く傳は

うんことを希わにすりて快く之を諾しあはせて
素懐を述べて解題にかへる。

大正六年二月

山田孝雄識

昭和十四年八月二十日寫了

中村俊定藏